

# 先人の知恵から

## 18

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

最近、子どもたちと話していて、諺が中々通じないと感じている。あまり知らないのである。中学受験をする子は、塾などで諺を学んでいるだろうが、学校でほとんど諺を学んでいない。新しい諺も出来ているくらいなのに、諺は生活上必要ないということだろうか？古くから言われていることは、時代が変わっても通用すると思う。

ところで、不思議と自閉性スペクトラムの傾向を持つ子ども達には、諺がすんなり入ったりする。この反応がとても興味深い。彼らにとって諺の様に古いものがしっくり

くるのかもしれない。

今回は、き行から次の7つを挙げてみた。

- 聞いて極楽見て地獄
- 聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥
- 聞くは気の毒、見るは目の毒
- 雉<sup>きじ</sup>も鳴かすば撃たれまい
- 疑心<sup>ぎしん</sup>暗鬼<sup>あんき</sup>を生<sup>しょう</sup>ず
- 木強ければ則ち折る
- 木の長きを求むるものは必ず根本を固くす

### <聞いて極楽見て地獄>

人から聞いていた話と実際に見たのとでは、全く違うことのとえ。話に聞いていた所では極楽のようなことが、実際に見てみたら地獄のようだったということから。江戸いろはがるたの一つ。

赤ちゃんを産む前と後では、こんな気分になる母親もいると思う。赤ちゃんがおなかの中にいる時は、身体も重たく不自由だし、周りの人や自分自身も生まれるのを心待ちにしている、「可愛いだろうなあ」とか「嬉しいだろうなあ」などと思ったりする。子育ては大変だけど楽しいなどと聞いていると、想像の中では、楽しいという方に重点が行きがちだ。責任重大だとか、すごく大変で眠れないなどと聞いている人は少ないし、そう思う人もいないわけではないが、楽しみの方が強いだろう。極楽とは言わないまでも、浮き浮きした気持ちになる。赤ちゃんの物を用意するのも又楽しい。しかし生まれてしばらくは本当に大変である。数時間ごとの授乳では、夜中でも容赦ない。夜中に何回も起きて授乳し、昼間も寝られるわけではない。ゲップをさせないと、戻してしまったりするし、おしめも度々交換しなければならない。これが何日も続くとなると、疲れがどんどんたまってきて、イライラすることだってある。

そんな時、夫の支えは大事である。ねぎらいの言葉の一つもかけてくれば、日々の疲れも和らぐ。それを子育ては母親の仕事だという態度で、何かお願いするたびに、嫌な顔をされれば、頼みたくもなくなる。

子育てはいつまで経ってもあれこれ悩み

事もあり、大変である。特に赤ちゃんの時期は、母親の体力は限界で、精神力だけで過すようなものだ。自分の時間など持ちようもない。

聴いていたのとは違う、思っていたのとは違うと感じる母親のためにも、現実をしっかりと伝えた方が良いのではと思う。地獄とまでは言わないが、子育ては大変だと思っていれば、実際の子育てが、思ったより楽だったと思えるかもしれない。少子高齢化の中、子育てを美化しすぎるのはいかなものかと思うので、この諺をあげてみた。

### <聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥>

知らないことは恥ずかしがらず積極的に質問した方が良いという教え。知らないことを聴くのは、その時は恥ずかしいが、聞かない居れば、一生そのことを知らないまま恥ずかしい思いをして過ごすことになるということ「聞くは一旦の恥、聞かぬは末代の恥」ともいう。

子どもたちも大人も、人に何かを聞くことに抵抗感がある。子どもたちは幼児期に「何で?」とか「これ何?」としつこく聞いてくる時期がある。その質問攻めには辟易するものだが、興味が増大する時期は当然のことである。思春期ごろになると、自分で調べることもできるようになるが、調べることが面倒だと親に聞いたりする。しかし最近はググってみる子が多く、そうしてもらった方が楽し正しい知識を得られると思っている親もいる。しかし、人にものを聞くという行為は、相手の人の様子を

みて、今聞いてよいときかどうか、どういう風に切り出さばよいか、なぜ聞くのかなど、色々考える行為を伴う。こうした配慮や、自分自身への問いかけはコミュニケーション能力をあげることに役立つ。自分でググって調べれば、答えを得られるかもしれないが、正しい答えばかりが載っているわけではない。辞書を引いたりという行為を面倒くさがって人に聞くというのがかつての子どもだったが、今はネットで調べる子が圧倒的だ。こういうところも子どもたちのコミュニケーション能力を下げているのではと思う。

一方、母親たちも同様で、子育てで悩むと多くの母親がネットで調べたり、ツイートしたりして答えを得ている。人と話すことが苦手という母親が増えている。保健師さんは母親の子育てを支援してくれる身近な支援者だ。最近は電話でも、メールでも対応するようになった。メールでの対応は生のやり取りとは少し違うが、それでも聞いてくれた方がよい。子育てで迷ったり悩んだりしたら保健師さんに聞いてみようと言っているが、中々今時は難しい。

大人になるとこんなことも知らないのかと馬鹿にされる気がして、聞きづらいということがあろう。しかし、表題のことわざの様に、聞くことは一時の恥ではなるが、聞かないで勝手な行動をとったり、人に迷惑を掛けたり、ずっと知らないで過ごすことの方が大変なことになる。ググるだけではなく、もっと人と、生で関わって行ってほしいと思うこともありこの諺をあげてみた。

## <聞くは気の毒、見るは目の毒>

知らずにいれば済むことを、なまじ見たり聞いたりすると、心を悩ませたり欲望が起こったりして、迷いの元になるということ。

世の中では、一つのことについて良いことも悪いことも、真偽を問わず、情報があふれている。子育てにおいても同様である。予防接種の副作用、母乳一筋、アトピーに対する食事療法、ステロイドの副作用、数え上げたらきりが無い。病気や発達障がいについても、テレビで色々報道されていると、ついつい観てしまうのも仕方がない。

或いは、裕福な家庭の生活や、これが一般的な家庭の収入ですなどと報道されると、我が家はどうかと比較し、現実を再認識して辛くなってしまうことさえある。

新しい車の広告を見れば欲しいと思うし、通販を見ていらぬものを買ってしまうこともしばしばであろう。痩せる薬や健康器具の広告を見れば、買ってみたくなるのもダイエットしたい人にとっては当然である。広告には誇大広告もあるし、見聞きするものの真偽のほどは定かではないが、心理的に影響されるのは仕方がないし、それを見越しての広告である。

情報過多の時代に、正しくない情報や、知らなければ迷わなかったであろう情報に翻弄されている人たちに対し、一度入ってしまった情報を消すこともできず、真偽を伝えても中々修正されない中、我々支援者はとても大変な日々を送っている。筆者自身も、悩んでいる人に昔からのこの諺を伝え、見聞きするという事はそういう悩み

や迷いを伴うものだから、ネットやテレビでの情報は程々にしようと伝えている。

### <雉も鳴かすば撃たれまい>

なまじ無用な発言をしたために、禍を招くことのたとえ。雉も鳴かなければ所在に気づかれず、撃たれることもなかったろうにという意から。

我が家の周りでは野生の雉を時々見かける。散歩をしていると、突然「ケーン」と鳴いて飛び立っていく。そのたびに、この諺を思い出す。歩いていて全くその存在に気づいていないのに、雉はいきなり鳴くから、その存在に気づく。

子どもでも大人でも、思ったことを言いたいが、余計なことを言ったためにひどい目にあうことは多々あるだろう。政治家が問題発言で謝罪することや失職することなどがそのよい例であろう。

言葉というものは一度出てしまったらもう戻すことはできない。それが怖いから最近の人たちは文字情報でやり取りをしようとする。しかし失敗することは人生においてとても大事なことだと思う。特に子どものうちは、どんどん失敗すべきだろう。失敗から学ぶことは成功から学ぶことよりはるかに多いと思う。

わざわざ余計な発言をしてしまったために、嫌な思いをしている子どもや大人に、昔からそういうことがあるのだとこの諺を伝え、次からどのように気を付ければよいか考えること、そしてそれを実践していくことがさらなる成長に結びつくのだと伝え

ている。

英語では・・・

Quietness is the best, as the fox said when he bit the cock`s head off. (雄鶏の頭をかみ切った狐が言うには、静かにしているのがいちばんよい)

### <疑心暗鬼を生ず>

心に疑いがあると、なんでもないことまで恐ろしく思えたり、疑わしく思えたりするということ。疑いの心があると、暗闇の中にいるはずもない鬼の姿が見えたりするという意から。「疑心暗鬼を作る」ともいう。出典は列子

疑い始めたらきりが無い。そんな経験は誰でもあるだろう。

学校でも家庭でも、子どもをひとたび信じられなくなれば、子どもの行動が更に疑わしく思えてくる。子どもがいくら本当のことを言っても、先ず信じないだろう。その状況になったら、子どもも何も言わなくなるだろう。話さなくなると更に親や教師は不信感を大きくする。こうして親子や先生と生徒の関係が崩れていく。夫婦の関係も同様である。

同じ言葉を聞いても、信じている時と疑っている時とでは受け止め方も変わる。気の持ちようでどうとでもなる。先ずは信じるころから始めてほしいと思う。ゆがんだ関係性があるときにこの諺を伝えている。

## ＜木強ければ則ち折る＞

強気一本で押し通そうとする人は、柔軟性がなく挫けやすいということのたとえ。しなやかさのない堅い木は折れやすいことから。「木強ければ折れ易し」ともいう。  
出典は列子・淮南子

固いというか、融通が利かないというか、そういう人が大人にも子どもにも見られる。世の中すべて白か黒かで決め込む人や、一つのことを多角的にみるのが苦手な人は何処にでもいる。

そういう人たちに、諺を伝えると意外と伝わることが多い。昔から言われていることというのは、誰にでも伝わりやすいと感じるのは、こういう時である。だから筆者は諺を多用しているのかもしれない。

自説を曲げない時、もう少し広い視野で見てほしいと思う時、違う面から見たらどうなるかなどを考えてほしい時、時と場合があるとわかってほしい時、等々、様々な場面で、この諺が思い浮かぶ。もう一つ「柳に雪折れなし」も使う。一本気なことが悪いことではないのだが、何でもかんでもそれで通そうとすると生きづらいということを知ってもらうための諺である。

## ＜木の長きを求むるものは

### 必ず根本を固くす＞

大きな発展を願うものは、基礎をしっかりかためなければならぬということのたとえ。木が大きくなるのを望むものは、その根元をしっかり固めるという意から。

人間も木も大きく育つためには土台が大事である。木でいえば、根元をしっかり固めるということだが、人間の場合は、乳幼児期をどう育てるかである。愛着形成不全ということが言われて久しいが、親子関係の最初の部分が乳幼児期であり、その時期を丁寧に育てれば、子どもは心身ともに健やかに育っていく元ができる。

その先もちろん木と同様に、栄養や剪定と言った養育行動が必要であるが、やはり土台がしっかりしていると子どもはそこそ順調に育っていく。

動物でもなんでも、育てるということにおいては基本的に同じで、最初が肝心だと思える諺である。一生懸命子育てを頑張っている母親の労をねぎらう時にこの諺を使っている。

## 出典説明

列子・・・全八巻。中国、道家の思想書。

戦国時代の、思想家列禦寇（列子）の撰とされるが、異説も多い。道家思想に基づいた心虚思想（心をむなしくして欲にとらわれないこと）を説く。

淮南子・・・五巻二十四編。中国、戦国時代の兵法書。古来の兵法化のことばなどをもとにして、尉繚の兵法の説を集録したものとされたものとされるが異説もある。